

## 『学会見聞記』

ASCO体験記  
The report of my experience in ASCO

丹保 裕一

金沢大学大学院医学系研究科がん医科学  
細胞移植学 博士課程4年

2009年5月29日から6月2日までアメリカフロリダ州のオーランドにて米国臨床腫瘍学会(American Society of Clinical Oncology; ASCO)の学術集会が開催されました。H1N1インフルエンザの世界感染拡大のため、海外渡航が極めて厳しかった状況であり、直前まで行くかどうか判断に悩まされました。しかし、H1N1インフルエンザが日本国内で発生したため渡航制限がやや緩和されたことや、病院の協力もあり、無事参加することができました。オーランドは、ディズニーワールド、ユニバーサルスタジオ、シーワールドといった有名なアミューズメントパークがある他、多くのゴルフ場や現在日本でも多くあるアウトレットモールなど、いろいろと観光できる場所もありますが、一日中ホテル内のプールなどでゆっくりすることもできるアメリカ最大級のリゾート地でもあります。滞在中、学会の日程で埋め尽くされていたこともありますが、上述のように日本がインフルエンザに敏感だったこともあり、上述のように日本がインフルエンザに敏感だったこともあり、多少外出を控えていたため、オーランドの町の雰囲気あまり味わうことはできませんでした。

今回参加した学会は、臨床腫瘍学の分野では世界で最も権威のある学会で、毎年30000人の参加者がいます。自身の参加はこれまでに3回ありましたが、世界から発表されるエビデンスに、毎回強い衝撃を受けておりました。今回はそのような学会で自分の研究成果が発表できるということもあり、きちんと発表ができるかという緊張とともに、世界中の研究者達から、どのように評価されるかという不安とも楽しみとも言い切れないような気分を持って参加しました。

私は非小細胞肺癌のEGFR遺伝子とK-ras遺伝子に関する研究を行っており、今回はその結果について発表を行いました。EGFR遺伝子とK-ras遺伝子は、上皮成長因子受容体チロシンキナーゼ阻害薬(EGFR-TKI)であるゲフィチニブやエルロチニブの効果予測に有用であり、EGFR遺伝子変異を有する非小細胞肺癌は、EGFR-TKIに対して強い感受性があり、K-ras遺伝子変異を有する非小細胞肺癌は、EGFR-TKIに対して自然耐性を有することが既に知られており、現在も臨床応用されています。また、EGFR遺伝子変異を有する症例が少ない欧米では、EGFR遺伝子増幅もEGFR-TKIの感受性予測として利用されています。

演題名は「Prognostic and predictive impact of EGFR and K-ras mutations, and EGFR gene copy number in patients with advanced non-small cell lung cancer(NSCLC) received first-line cytotoxic chemotherapy」というもので、EGFR遺伝子変異、K-ras遺伝子変異、EGFR遺伝子増幅の3つのバイオマーカーを診断時に得られた組織を用いて測定し、そのバイオマーカーが化学療法の効果にどのような影響を与えるか、またその影響が予後にどのような影響を及ぼすかを調べたものです。

2日目の14時から18時に行われるポスター発表でしたが、例年はその間に他のプログラムが入るため実質1から2時間程立っていれば充分でした。しかし今年は、別のプログラムがなかったこともあり、4時間絶え間なく多くの人が発表を見に来るという盛況ぶりでした。おかげで、日本から持参したポスターのハンドアウト100部と、名刺約30枚全て「売り切れ」状態となりました。その分質問も多く受け、なんとか80%以上は質問者

が納得のいく回答をできたように思いますが、いくつかは日本語でも答えることが難しい質問も受けました(その人にはメールアドレスを交換し、後日返事させていただきました)。

そのなかで特に印象に残った出来事をいくつか。一つは、EGFRやK-ras研究の第一人者が興味を示してくださり、直接会話ができたことです。私のポスターの横では、アメリカ、ニューヨークにあるMemorial Sloan-Kettering Cancer Centerの若手医師による発表があったのですが、そのボスが、K-ras遺伝子変異がEGFR-TKIの耐性に関わっているということや、EGFR遺伝子の2次変異がEGFR-TKIの獲得耐性に関わっていることを世界で最初に発表したWilliam Pao先生でした。そのPao先生が私の発表に興味を示してくださり、わずかな時間ではありましたが、有意義なディスカッションを行うことができました。他にも、New England Journal of Medicineに掲載されているエルロチニブに関連した臨床試験のバイオマーカー解析の筆頭著者であるMing-Sound Tsao先生も足を運んでくださりました。その先生からは、EGFR遺伝子変異やK-ras遺伝子変異の人種差に関して貴重なご意見をいただくことができました。

もう一つの印象的だったことは、質疑応答の最後に「Congratulations!!」と言いついて残っていた方がいたことです。この学会は権威のある学会であることは前述しましたが、演題も約半分程度しか採択されないということもあり、ここで発表できることは大変な栄誉であり、まさに「祝うべきこと」であるということを実感しました。

この日は、地元のバスケットボールチームであるオーランドマジックスがNBAファイナルの進出を決めた日でもありました。さすがに会場で見るとは不可能に近いので、学会の後に街のスポーツバーで応援をしながら地元の人達に混じって騒ぎに行こうかと考えていたのですが、4時間立ち続けたことや慣れない英語で神経を使ったこともあり、夕食後ホテルですぐに寝てしまいました。それぐらい疲れてしまったわけですが、それでも再び発表の場に立てればという思いは一層強くなりました。しかしそのためには、次々と進んでいく世界の研究に遅れないよう、新たな研究に励まなければならないのだということを実感させられました。

最後になりましたが、今回発表することができたのも、指導していただいた教官の先生、研究に参加頂いた関連病院の先生方、ラボの方々、そして今回の研究に協力頂いた患者様とご家族など多くの方のおかげと感じております。この場を借りて感謝申し上げます。

